

去る六月十五日、中国共産党中央委員会が毛沢東主席は今後外国賓客と会見しない旨を発表し、いよいよ毛沢東以後の中国への歩みが急ピッチになったと思われていた矢先、この七月六日には朱徳・全国人民代表大会常務委員長が逝去した。朱徳氏は、去る六月二十一日に、外国要人との会見をとりやめた毛主席にかわってフレーザー・オーストラリア首相と会見したばかりであったのに、やはり天寿はいかんともしがたいものである。

●外交時評

毛以後への中国と北方領土

中嶋嶺雄 (東京外国語大学助教授)

周知のように、かつて「朱毛」とも称せられた朱徳氏は、人民解放軍の創設者であり、中国共産党の最長老であった。それだけに、激動相次ぐ党内闘争のなかで、毛沢東主席およびその側近が主導する政治のあり方を、その判定者としてじっと見守っていてほしいという願いが、多くの幹部や党員の間に潜在していたのではなからうか。その朱徳氏亡き現在、毛沢東主席の運命力と生命力の強さを改めて感ぜざるを得ないが、同時にいよいよ毛沢東以後への時間が切迫しつつあることは否めないところである。

そうした状況のなかで注目されたのは、朱徳氏の死を悼むソ連のメッセージであった。ソ連最高会議幹部会名で七月八日に送られた弔電は、「ソ連人民は、傑出した国際主義者、革命家であり、伝説的な軍の指導者であり、また中国解放の闘士であった朱徳氏の思い出をいつまでも心の中にとどめるであろう」と述べ、朱徳氏を大いにたたえている。故周恩来首相の場合とも大きく異なるこの弔電の本身は、中ソ友好時代の再来を思わせるようなものである。ソ連



としては、朱徳氏がかつて文化大革命の時期に紅衛兵などから激しく批判されたことが示すように、つねに党内の穏健派であり、潜在的な毛沢東批判者であったことを高く評価したのであろう。だが同時に、党・軍双方に対して毛沢東以後の時代の変化を大いに期待すればこそ、このような弔電を打ったものと思われる。

この事実が示唆するものは、毛以後の中国における中ソ関係の変化の可能性であろう。いまこの小論では、その変化の可能性の具体的内実に触れる余裕はないが、今日の中ソ関係を絶対

視し、固定的に問題を考へてはならないことはいうまでもない。ましてや、現在の中ソ対立に便乗して、もしくは、激しい対ソ批判をおこなう中国の当面の戦略方針にくみして対ソ要求や対ソ批判をおこなったりすべきではなからう。もしもそのような安易な対応をおこなうなら、それは問題の解決には、いさかかもならないばかりか、将来、中ソ関係に変化が生じたとき、わが国はきわめて困難で愚かしい立場に立たされるからである。

この点で宮沢外相が去る七月九日の参院外務委員会にて中国が最近わが国の北方領土問題をとりあげてしきりにソ連を非難している問題に触れ、中国側は中ソ対立の立場からこの問題に言及しているが、北方領土問題は純粋な日ソ二国間の問題であり、中国の主張はありがた迷惑だという主旨の考え方を示したのは、きわめて当然のことであった。

この点については、私もしばしば主張してきたところであるが、北方領土問題が中ソ対立の題材になっている現状をこれ以上、座視するわけにはゆかないであろう。実際には、この問題の帰すうも中ソ関係の将来に大いに規定される問題であるが、それだけに、わが国としては、あくまでもこの問題がわが国固有の問題であることを明白に主張してゆくべきであろう。宮沢外相の態度は、この点で大いに評価すべきものである。